

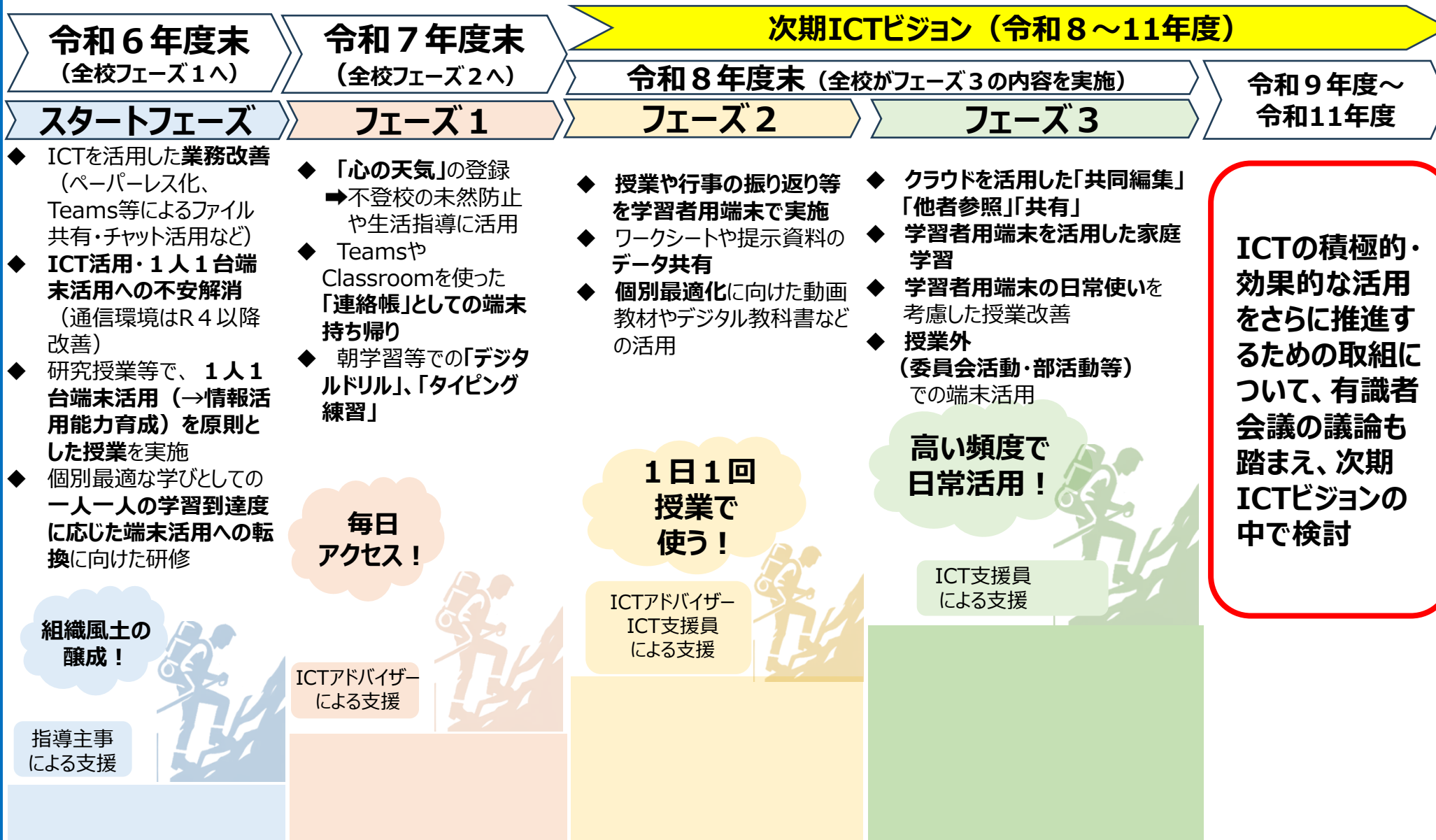
第1回次世代教育ICTの在り方に関する有識者会議 有識者のご意見まとめ

有識者	主なご意見
佐藤 昌宏 様 (座長)	・少子化、不登校、日本語指導が必要な子どもなど、これまでの教育でこういった課題に対応できるのかという課題意識があり、また、今の子どもたちはデジタルネイティブと言われ、当たり前のようにスマートフォンを持ち歩いており、社会人の働き方についても、コロナ禍をきっかけに、これまで抵抗感があったオンライン会議を行うなど、社会全体が大きく変わってきている。 ・教育には普遍的な要素もあるが、あり方を再考する時期が到来していると考える。 ・<u>これまでの教育を前提とせずに、2040年の教育のあるべき姿を考え、バックキャスト的にこれから取り組むべき内容について検討することが重要</u>である。 ・これをテクノロジーの活用を含めた「環境や仕組み」と「教育の内容」の2つのテーマでアウトプットしたい。
木村 明憲 様	・私はICTを活用して子どもたちが自分の行動や感情を調整しながら学習に向かえるようになるのが大事だと考えている。 ・子どもたちが自分の学習を振り返り、自己評価することを繰り返すことで、自身の認知特性を理解できるようになる。 ・<u>児童生徒が自分の学習をコントロールするための自己調整学習のツールとしてICTを活用するという仕組みができれば、毎日活用するということが現実的になり、フェーズ3にある共同編集や他者参照を前倒して活用できるようになるのでは思う。</u> ・今日、学習者が主体的に学ぶ授業を実現するといったテーマを掲げながらも、教科の学びの充実のみに議論が焦点化され、学習者が自ら学びを進めてることに対する授業改善や校内での研究が進みにくい事例も少なくない。教育は、子どもたちの未来を築いていくために行うものであり、教科の学びに対する議論だけでなく、子どもが主体に学ぶ授業をどのようにして実現するのかという視点で議論することを忘れてはならない。

第1回次世代教育ICTの在り方に関する有識者会議 有識者のご意見まとめ

有識者	主なご意見
衣川 洋佑 様	・自社のビジョンは「遊ぶように学ぶ世界」としており、2040年を目指して、自動的に学び続け、学び続けることが楽しいと思えるように、民間の立場でわくわくするような仕掛けをして、学校を知のテーマパークにしていきたいと考えている。 ・<u>児童生徒が、自主的に、自由に学び、生徒自身が考えるような授業や学校を作っていくためには、教員も学校もマインドチェンジする必要がある。</u> ・児童生徒を主体にすることの真意を考えることや、発生しうる問題を解決することを、楽しみながらやっていく必要があると考える。
岩崎 有朋 様	・今の日本の教育は本当に質が高いが、不登校に関しては学校に行く必要があるのかと思う。2040年には色々な所で学べるようになってほしい。 ・<u>資料のフェーズ2とフェーズ3で実施する取組についての進度が遅い</u>と考える。 ・日常的にテクノロジーを児童生徒の中に染み込ませていかなければ、2040年の教育をいくら描いたとしても、教員方の感覚に合わないといったところで実現されないと考える。 ・<u>まずフェーズで示されているような内容は令和8年には完了する勢いで取組み、現場の先生方の教育観を変えていく必要がある。</u>突出してできる学校や先生にはどんどん進めてもらって事例を共有すればよい。 ・児童生徒がテクノロジーを使って社会実装していくという場を作るためのアイデア出しをしていきたい。 ・データ活用に関しては、現場の教員の感覚とシンクタンクで分析したデータをうまくすり合わせて、現場に寄り添うようなデータ活用をしてほしい。
高岸 遥 様	・教員に加えて親も1人のステークホルダーであり、自分を律する心や性格特性は子どもが小さいときに、大体固定されてしまうといわれている。親が第1の教育者だということを教員は思っているが、親自身はそう思っていない場合が多いというジレンマもあると思う。ICTの活用により不要にコミュニケーションを剥奪しないようにすべきであるし、家庭でもICTに関するガイドライン等のルールをもとに親が介入するとより良いと考える。 ・<u>端末活用率に関して、教員の属性との関連に係る分析があると、教員に対するサポート体制も見えてくるかと思う。</u>

学習者用端末活用に向けた今後の展開



ICTの積極的・効果的な活用をさらに推進するための取組について、有識者会議の議論も踏まえ、次期ICTビジョンの中で検討

2040年社会を見据えた
大阪市教育ICTのあるべき将来像を
有識者を交えた
会議体で議論

フェーズ毎の学校分類について

各校に展開している「学習者用端末活用率」、「全国学力・学習状況調査児童生徒質問紙」の結果および「ICT教育推進アドバイザー等による定性的な評価」をもとに総合的に判断します。

第Ⅰ回次世代教育ICTの在り方に関する有識者会議における高岸様のご発言より
「端末活用のアンケートに関して、先生方がどういう傾向にあるのかというデータはあるんでしょうか。例えばよく聞くのが、年配の先生だとあんまりICTを使わないというようなことを聞いたことがあるんですが、それ以外にも属性があったりするのかなと思ひまして。もし情報があれば伺いたいです。」

◆令和6年度

4月実施の全国学力・学習状況調査 児童質問紙結果（6年生）より
「これまでに受けた授業で、PC・タブレットなどのICT機器を、どの程度使用しましたか。」と
12月実施の大阪市小学校学力経年調査 児童質問紙結果（6年生）より
「授業で、パソコンやタブレットをどれくらい使っていますか」の経年比較

	ほぼ毎日	週3回以上	週1回以上	月1回以上	月1回未満
全国学力・学習状況調査（4月実施） 本市	16.0%	20.1%	26.9%	22.2%	14.7%
全国	25.3%	34.2%	26.0%	10.3%	4.2%
大阪市小学校学力経年調査（12月実施） 本市（児童6年生）	23.2	25.2	28.2	16.1	6.0

-23.4ポイント

+12.3ポイント

◆令和6年度 大阪市小学校学力経年調査結果（3年生～6年生）をもとに、児童の回答を次のとおり得点化し、学級担任の年代ごとに平均値を求め、平均の差について分散分析を行うとともに、その差について多重比較を行った。

ほぼ毎日	週3回以上	週1回以上	月1回以上	月1回未満	その他 (無解答等)
5点	4点	3点	2点	1点	0点

年代の分散分析結果及び多重比較結果

	20代 (n=22845)	30代 (n=23012)	40代 (n=17198)	50代 (n=17166)	60代 (n=1295)	F 値	多重比較
平均値	3.43	3.51	3.48	3.36	3.39	27.71**	
標準偏差	1.25	1.25	1.26	1.28	1.26		30代>40代>20代>60代=50代

** p<.01：自由度(4,71511)

【分析結果】年代による平均の差は有意であった。30代の平均値は他のいずれの年代より有意に高かった。

次期ICTビジョン策定
(2026年R8~2029
年R11) に向け提言

◀ バックキャストिंग
(あるべき姿からの逆算)

あるべき姿

端末利用率

基礎学力

不登校

外国ルーツ

などなど

現 状



あるべき姿

現状からの積み上げ

＜会議の基本ポリシー＞

各専門分野の視点から、2040年の環境変化を見通し、これまでの教育を前提としない自由な提言を頂きたい

＜重視するキーワード＞

・学習者中心

学習者を支える教育制度（学校、教員、自治体）

・個別最適（化）

データやテクノロジーの活用、発達段階による活用

・主体的な学び

STEAM、探究的な学び、求められる力

＜アウトプット＞

次期ICTビジョン策定会議への提言

2026年（R8）～2029年（R11）

問：2040年の日本、大阪市はどうなっているのか？

その中で教育はどうあるべきなのか？

「環境・仕組み」「教育内容」の2つの構造にアウトプットして行きたい

環境・仕組み

教育内容

